

聖書：ルカ 23：32～38

説教題：彼らをお赦してください

日時：2013年2月24日

イエス様はついに十字架につけられます。他にも二人の犯罪人が一緒でした。イエス様が彼らの真ん中で十字架に付けられたことは、イエス様が罪人たちの中に数えられたことを象徴しています。イザヤ書 53 章 12 節：「そむいた人たちとともに数えられたからである」 さてイエス様の十字架の記事は、4 福音書とも生々しくは記していません。血がどのように流れ落ちたとか、イエス様がどんな顔で耐えられたかなどは記していません。しかしそのことはここに目を覆うような残酷的な姿はなかったということではありません。33 節に「イエスと犯罪人とを十字架につけた」と一言で書かれていますが、実際には大変な状況があったでしょう。十字架に張り付けにされる人の中には、縄で縛りつけられる人もあったそうですが、イエス様の場合にはっきりしていることは、釘で打ちつけられたことです。後に弟子のトマスが、「私は、その手に釘の跡を見、そこに私の指を差し入れてみなければ、信じません。」と語る通りです。また当時、十字架にかけられた人の骨が発見されたところ、その足は捻じ曲げられ、重ねられるようにして一本の釘で打たれていたそうです。その場合、苦しみはより大きなものになっただろうと言われます。イエス様の場合、どうだったのかは分かりません。しかしいずれであれ、この 33 節を読む時、そのような残酷な処置がなされたことを私たちは思わなければなりません。「そのとき」と 34 節は始まります。「そのとき、イエスはこう言われた。『父よ。彼らをお赦してください。彼らは、何をしているのか自分でわからないのです。』」

普通、こういう状況にある人から出て来る最初の言葉は怒りであり、叫びであり、苦々しさでしょう。自分を十字架につけた人々への恨みつらみ、自己憐憫の言葉・・・しかしイエス様は何と自分を十字架につけた人々を赦してください！と父なる神に向かってとりなしの祈りをされた。どうしてイエス様はこのように祈られたのか。ある人はそれはイエス様はいつも祈る生活をしてきたからと言います。だからこの最も苦しく厳しい状況でも、本能的に祈りがイエス様から出て来た。そしてその内容は敵の赦しを求める祈りでした。これはイエス様がいつも敵のためのとりなしに生きて来られたことの表れではないでしょうか。罪人の救いを何よりも心にかけて、祈りつつ歩んで来られたから、この時も「彼らをお赦してください！」という祈りが真っ先に出た。

イエス様がとりなしをされた「彼ら」とは誰のことでしょう。これはまずイエス様を十字架に打ちつけた兵士たちを指していると言えます。イエス様は「彼らは、何をしているのか自分でわからないのです。」と言われました。彼らがしていることは神の御子を十字架に釘付けにすることです。それがどんなに恐るべきことかを分かっているから、彼らにはそれができる。

またこの「彼ら」には、イエス様を実質的に十字架の苦しみへ追いやったユダヤ人の祭司長や指導者たちも含まれていたでしょう。彼らは妬みからイエス様を十字架へ追いやりました。イエス様が来る前まで彼らは自分の義を誇ることができましたが、まことの光なるイエス様が来たことによって、彼らの偽りの義はみな引剥がされてしまいました。彼らはそれが面白くなくて、イエス様を除き去ろうと陰謀を企み、ついに思う通りのことを実現しました。そんな彼らのためにイエス様は「父よ、彼らをお赦してください。彼らは何をしているのか分からないのです！」と祈ってくださった。

またここには民衆もいました。彼らは祭司長たちに扇動されたとは言え、付和雷同して、イエス様を「十字架につけろ！」と叫びました。彼らも自分たちのしていることが分かっていない。その彼らのためにもイエス様は祈られた。

そしてこの「彼ら」には、この場にいなかったけれども、イエス様によって救われるべきすべての人々、今日の私たちも含まれていたでしょう。私たちも自分を振り返って、しばしば、自分は一体何をして来たのか、と愕然とする時があります。目先の利得ばかりを追い求めたり、自己中心的な歩みをして、何と愚かな歩みを自分は重ねてしまったことか、と。神を見失っているならば必ずそうなるのです。最も大事な神との関係という座標軸が見失われているので、何かを一生懸命行なってもどんどんずれて行くのです。そして気がつかない内に自分の罪を周りにまき散らし、大事な人々と自分とを傷つけ、悲惨と苦しみをもたらしてしまっている。イエス様はそんな私たちのためにも、この祈りを祈ってくださった。

さて人々はどうしていたでしょう。34 節後半で兵士たちはくじを引いてイエス様の着物を分けました。35 節で民衆はそばに立って眺めているだけでした。ユダヤ人の指導者たちは、あざ笑ってこう言いました。「あれは他人を救った。もし、神のキリストで、選ばれた者なら、自分を救ってみろ。」 36～37 節でローマの兵士たちもあざけりに加わり、「ユダヤ人の王なら、自分を救え。」と言いました。ルカがこのような言葉を書き記したのは、単にイエス様の敵がこのような言葉で侮辱したことを伝えたいからではなく、ここに私たちが良く思い巡らすべき重要な意味があるからでしょう。私たちが問うべきは、イエス様は本当に自分を救うことはできなかったのか、ということです。指導者たちは、「あれは他人を救った」と言いましたが、これはイエス様が病人を癒したり、5000 人にパンと魚を与えたり、死人を生き返らせたこと等を差しているでしょう。そのようにかつては人々の救いのために偉大な力を発揮した人が、今ここでは自分を救い出せないでいる。前にはあれだけ大きなみわざをして見せた人が、今はそれをすることができない。この一見矛盾した二つの事実をどのように解釈するかには二つの道が考えられます。

その一つは、指導者たちが取っている道ですが、自分を救い出す力がないのだから、かつてのみわざもいよいよ加減なものであったに過ぎないという見方です。今、自分の命がかかっているこの土壇場で自分を救い出せないということは、イエスは本当の意味での救い主ではなく、む

しろペテン師だったことの証明であると解釈する道です。

しかし、もう一つの見方があります。それは、イエス様はこれまでと同じように偉大な力を発揮してご自分を十字架から救うことは可能であったが、あえてその道を選ばなかったと理解する道です。嵐をたった一言で静め、少しのパンから 5000 人に食べさせることのできたお方にとって、十字架から降りることは至って簡単であった。しかしもし降りてしまったら、人々の救いがなくなってしまいます。イエス様がこの世に来られた目的がすべてパーになります。つまりイエス様は人々の救いを成し遂げるために、降りなかったのです。「他人は救ったが、自分は救えない」という敵の言葉は真理を語っており、イエス様は他人を救うために、自分を救わなかったのです。その姿はこれまでも示されて来ました。イエス様は裁判において人々の不当な訴えを前にして、一切自己弁護せず、黙っておられました。すなわち他人を救うためにご自分を救わなかったのです。またイエス様は十字架に上げられた後、自分のことではなく、自分を十字架につけた人たちをとりなすことにまず向かわれました。そこにもイエス様は他人を救うためにご自分を救わなかったことが示されています。

イエス様にとってこれは簡単な選択ではありませんでした。この時、イエス様は両手両足に釘が打ちこまれ、その肉が裂け、血を流す大変な苦しみのただ中にありました。そしてイエス様が受けられた苦しみとは、肉体的な苦しみ以上に、人間の罪に対する神の怒りを一身に背負うものでした。イエス様はその死を恐れ、ゲッセマネの園では汗を血のしずくのように滴り落として祈りの格闘をされました。そしてついにはあれほど恐れ、祈り、叫ばれた苦しみを、イエス様は十字架上で刻々と味わっておられた。どうしてそのような非常な苦しみのただ中にありながら、イエス様は十字架から降りなかったのでしょうか。ある人は言いました。イエス様を十字架から降ろさせなかったのは御手と御足に打ち込まれた太い釘の力ではない。そうではなく、私たち罪人を救わずにおくものか、という主の愛がご自身をそこに留め続けたのだ、と。イエス様の頭上には「これはユダヤ人の王」と書いた札があり、兵士たちは王であるのに自分を救えないと言ってあざけりました。しかし正しくは、私たちの王である方が尊いご自身を身代わりにささげて、私たちの救いのために仕えてくださっていたのです。

このように十字架の上の本物の王様の姿が見えたなら、私たちはとてもこの方に「降りてみる」とか、「自分を救って見せろ」などとは言えない。むしろ私たちは私たちのためにここまでの犠牲を払ってくださった尊いお方の前にひれ伏し、深く感謝し、礼拝するより他ありません。そしてこの方が祈ってくださった祈りを、自分のためのものと感謝して受け取るべきです。

イエス様は「父よ、彼らをお赦してください」と祈られました。ここでイエス様が誰かの名前を特定しないで「彼らを」という表現が使われたのは意図的であったとある人は言っています。イエス様はこのようにして、すべての人々をこの祝福へ招いておられるのです。私たちは、この「彼らを」という部分に自分の名前を入れて、主が私のために祈ってくださった祈りとして受け取るべきである。「父よ、阿部大をお赦してください」。皆さんも一人一人そこに自分の名

前を入れていただきたい。そしてイエス様がそのように祈ってくださったことをアーメンと言って受け入れるなら、このイエス様の赦しの祈りは本当に私たちの上に実現・成就するのです。そして私たちは神の前に罪赦され、義とされ、恐れなく神の前に進み出て、神の子どもとして、永遠のいのちの祝福に入る者とされるのです。